せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42－2590
第123号・平成11年12月1日

年表で読む 古平の歴史

《31》

■古平郡内の町名を改称

明治十年、その当時、古平郡を管轄していた＊第五大区区長の出羽佐太郎は、古平郡内の町・村名を改称するのに、次のような上申書を小樽分署に出しています。

（現在の文章に書き直し）

「区内の古平郡のことですが、住民の多くは漁業によって生活をし、海岸は断崖のため村落は点々としております。住居は地域に片寄りまばらで、町名のついているのは、僅かに新地と入舟の二町だけです。

しかし、近ごろは年々人家が増えてきて、浜中・垂美両村などは家が立ち並び、商店を開業する者もあって、市街地としての形が整ってきました。特に今回、古平郡に船改派出所が置かれることになり、今後、入港する船が増えるのは確実です。

先年、新地・入舟両町の間に小川を掘り、湿地帯を改良して、明治五年には縦横に道路をつくり、地割りをして、家屋を建てられるように工事をしたところ、次第に人家が建つようになりました。しかし、未だ町名がついておりません。

つきましては、新地から丸山麓に向かう通路に新たに丸山町と町名をつけ、また、浜中・垂美両村を改称して、浜中村を浜町、垂美村を湊町として古い気風を一新し、古平郡のますますの繁栄の基礎となれば、これは甚だ幸いなことではなかろうかと考えます。

願いをお聞き届けいただき、これをご採用くださいますよう、別紙の図面を添え、速やかにご改正のご詮議のほどをお願い申し上げます。

明治十年十一月

第五大区々長　出羽佐太郎

小樽御分署

× ×

■開拓使から太政大臣へ

この上申書は開拓長官黒田清隆から、太政大臣へ上申の手続きがとられました。

町名新設等之儀上申

当使管下後志国古平郡新地入舟両町ノ内ヲ分裂シテ新ニ町名ヲ設ケ及ヒ同郡垂美村外一ヲ町名ニ改称候ニ付別紙ノ通布達候条此段上申候也

明治十二年四月廿日

開拓長官　黒田清隆

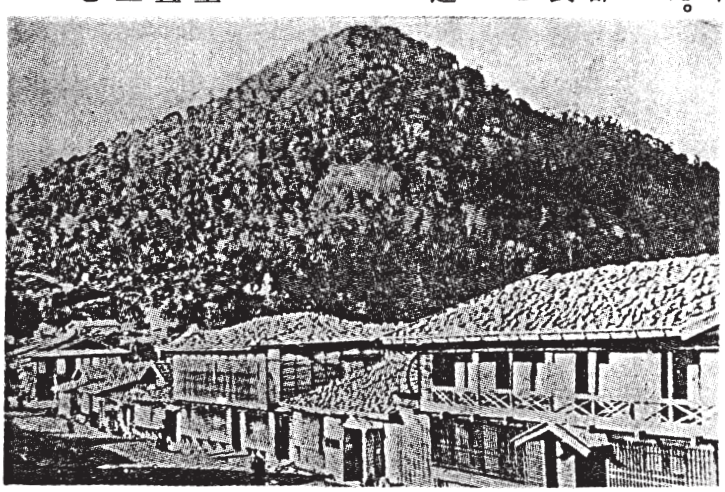
太政大臣　三条実美殿

× ×

先の上申書は地券（土地の権利書）などの調査の関係もあり、明治十二年四月三十日付で認可されました。

＊明治九年、札幌管内の石狩・後志・胆振の各国が大・小区制になり、古平・美国・積丹の三郡は第五大区となり、古平郡では沖村から浜中村までが第一小区、垂美村から群来村までが第二小区となりました。

出羽佐太郎＝海軍大将出羽重遠の父で、出羽重遠は日露戦争での海戦で軍功があり、後に男爵を授けられました。



明治7～10年ころの新地町から丸山を見る

浜の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【24】

3／28　二、三日大荒れだったが今日はなぎになった、古英丸、富丸が久しぶりに来る。七時過ぎから鰊模様があるというので浜は活気づく、では五、六杯、あちこちで獲れたというので浜は大騒ぎだ。

3／29　快晴、朝早く浜に出て見る。△五、六杯、崎長四、五杯、○、〆、は二、三杯、群来村では　が二、三杯、㋕では浜に四、五十も箱を並べて生鰊を入れて塩を振っている、箱詰めで余市へ出すそうだ。町も初鰊で景気づき、家でも二十余軒から初鰊を貰う。農園では雪の中枝切りをしている。

3／31　暖気で雪も消える。夜、火防組合の巡回に出る、月が出て星もキラキラと輝き静かな夜だ。

4／2　昨夜から暴風雨、明け方から少しナギ担った。鰊漁は建網、刺網ともに皆無だ。昨年は今ごろかなりの漁があったが、ことしは今まででようやく五千石ぐら以下、今のところ余市六千石で全道一の大漁だ。

4／3　快晴、鰊漁は丸山、本陣で五杯、そのほかは一～二杯、昨年は七、八日ころから十五、六日ころにかけて大々漁だったのだから、まだ悲観することはない、今日は父も加わり、三人で農園の枝切り、花屋の前では子どもたちがコマ廻しをしている。

4／4　昼ごろから雪が降り出す、刺網に少し掛かったくらいでさびしい漁だ。今日までで千石ぐらい、余市、積丹、美国古平の順で一番負けている。美国で火事、二軒焼けた。

4／5　浜に出て見る、沖の方に刺した刺網は皆よかったとのこと、歌棄山中の△、〆では三～四杯、〆、西村は皆無。

4／6　鰊模様があるというので大騒ぎだったか全く無し、町内は意気消沈している。

4／7　歌棄山中で崎長が二～三杯、刺網は一もっこぐらい夜になって鰊模様がある。火をたいている、朝六時ころ浜に出て見ると、建網に相当掛かっている、西村歩方三杯、○、十杯、　共同十五杯、そのほか〆、一枠、△三十杯、崎長、△五～六杯、時化で沖揚げが困難のよう、刺網など水舟になっているのがある、汽船二隻、川崎船五～六隻が枠を港内へ引いている、本日の漁獲高は約二千五百石。

4／10　きょうは上ナギ、昨夜から鰊模様があるというので大騒ぎ、手間取りの連中がドヤドヤ走って行く、入舟町から歌棄山中にかけて漁がある、漁は薄かったが一帯に獲れた、三～十三、四杯、まずは中漁であった、刺網は十本から三十本と大漁であった。

4／14　このところずうっと鰊漁がない、どうしたことかと皆心配している。自転車を出して初めて乗る、代議士選挙が近づいて、各地で選挙戦もいよいよ激烈になってきた。

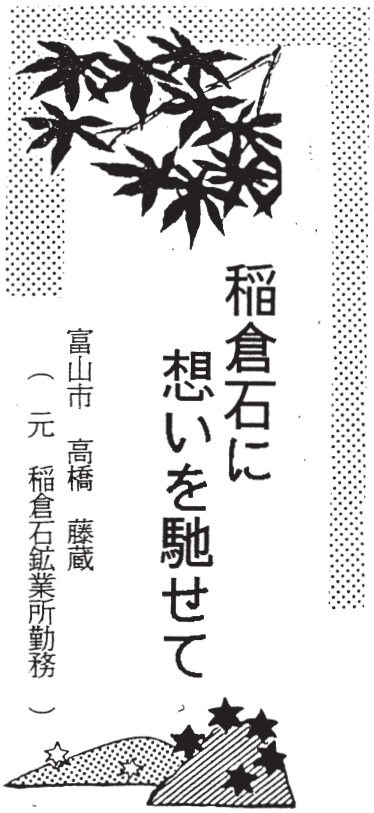
4／15　困へ行く、岩内の目黒という予言者とかが来て、今夜は大漁だとか言っていた、衆議院議員候補の植田重太郎から電信で依頼があった。

4／16　あの目黒とか言う人の予言では、昨夜大漁とのことであったが、鰊漁は今日も無いこの分だと今年は大不漁だ、一万石もない。皆ひまなので、カレ網など始める者もいる、鰊漁期中にこんなことは実に稀なことだ、市況はさらに不振だ。

4／17　昨夜からの雨が止まない、時化模様で網を揚げている、十時ころから雪になり、寒中のような空になった、あまり鰊がないので、新地町の正さんらが発起人になって、大漁祈願をするから賛成してくれとのこと、五十銭を寄付する、三時から新地郷社（琴平神社）で大漁祈願をするとのことだ。

4／18　昨日、郷社で大漁祈願をして、そのときの赤飯と供物を貰った。

――つづく――



稲倉石に想いを馳せて

富山市　高橋　藤蔵
（元　稲倉石鉱業所勤務）

先般「東京・関東地区稲倉石会」が開かれました。

青柳元所長さんとお世話好きの石井さんのご尽力によるもので、期日は九月四日。場所は旧鐵興社ビルから目と鼻の先にある「うおや一丁」という居酒屋で、店のキャッチフレーズが

ここ一軒で北海道
磯の香りタップリの
海鮮ざんまい

となっており、私たちの会合にピッタリのお店でした。

お店に入る前に旧鐵興社ビルに寄ってみました。外観は変わっていませんでしたが、ビルの看板が「東ソー京橋ビル」に変わっており、ちょっぴり時代の変遷と哀愁を覚えました。

会のご案内は東京・関東地区の会員と、東京に日帰り可能な会員を含めて五十余名にお出しになったそうです。

出・欠のご返事をいただいた方が三十数名。うち、出席されたのが

東京・関東地区より	八名
山形県より	二名
宮城県より	一名
富山県より	一名
計	十二名

でした。

ちょっと少ないのではと思いがちですが、振り返ってみますと、稲倉石鉱山が苦境打開の一環として、大幅な人員整理と社内転勤を行った昭和三十六・七年から三十七・八年が経ち、その後、大江鉱山に売山した昭和四十五年からでも、すでに二十九年も経ったのです。

当時働き盛りの四十才代の方は七十才代に、もっとも若かった三十才代の方ですら六十才代になったのです

こうした中で、今なお健康をたもち、北海道の秘境である積丹半島に抱かれた稲倉石に思いを寄せ、旧友との心の絆を秘めたお仲間が、遠路での集いに馳せてくれたのです。

出席者は、東京・関東地区稲倉石会の常連の方、稲倉石でお別れしてから数十年振りの方など様々で、頭髪が薄れ白いものが増えてはおりましたが、若かった頃の気迫と声の張りは当時をほうふつさせ、まるで昨日まで一緒に仕事をしていたかのように感じられ、長年の空白が嘘みたいな気がしました。

青柳さんのご挨拶ではじまった懇親会では、古平や積丹のこと、稲倉石での出来事・同僚の事・転職後の苦労話し・近況などが生き生きと語られました。

稲倉石を離れ、社内を転々とされた方、新たな分野に転出し苦労を重ねられた方、さまざまな社会の荒波にもまれながらも今は社会的地位にたたれご活躍なされている方、家族との団欒の中で恵まれた毎日を送っておられる方など、それぞれ充実した生活を謳歌されておられるようでした。

まだまだ語り尽くせない久々の語らいも、お店の予約時間と遠路参加者の帰宅列車の時間をにらみながら、名残を残してのお開きとなりなした。

本当に短い時間の再会でしたが、久々にお会いできた楽しい思い出を胸に、何度も何度も振り返り、何度も何度も手をかざしながら、東京という名の巨大な雑踏の中を家路の人となりました。

当日お配りした会員の近況集

古平の名勝地
霊場 観音滝ものがたり
≪5≫

滝の水は水田に流れて
豊作・海に注いで豊漁

祝聖会が観音滝の建設を決めると、町内の仏教会や有志にもはたらきかけ、これらの人たちが発起人となって、『観音の滝建設趣意書』を町内に配布し、広くその賛同者を求めました。

観音の滝趣意

今般、東宮殿下ご成婚記念として、従来、「ドロノキ」の滝（一名デトの滝）、泥の木本村よりおよそ十五町川上にあり、浜町市街地より約一里半ほどの山紫水明、四季の風景に富む好個の霊地にして、付近には水田も沢山あり、将来、農産発展の有望地なり。ここに祝聖会（同会はご成婚に発会し、毎朝、聖上陛下のご安泰を祈り、特に毎月一日と十五日には早朝禅源寺に参り、陛下の聖寿万歳を祝祷する信仰に熱心な団体なり）主催となり、八月三十一日天長節の佳辰を卜し、厳粛なる命名式を挙行し、観音の滝と称す。

この日、幸いに前日来の強雨にもかかわらず好天気と晴れ、全く観音のご利益なりと感ぜられたり。会員をはじめ信仰の有志約三十名出席せられ、泥の木部落の人は挙村一致の援助をもって霊場を荘厳し、会員一同観音経を真読し、有志真性をこめたる一能ずつを吐露して盛大に霊化し、記念撮影をなして命名式は終われり。

今後、観音菩薩の石像一体を安置し、詠歌の碑を建設し、紅葉の時機（本年十月十七日「神嘗祭」の予定）を卜し、さらに盛大なる入仏供養を営み、信仰上より海陸の発展を祈り、将来古平の名所として、公平なる大自然の霊場を公開し、純信に共鳴せしめんがため、各種の遊覧を歓迎する目的なり。ねがわくば大方の諸賢ご賛助あらんことを切望す。

詠歌

古平の岸打つ波は水上の
観音滝へひゝくなるらん

不老庵 謹作

古昔より平和の土地は観音の浄土なり、その平和の土地にも、時々思想悪化の岸打つ浪風の立つことあれば、真如の月宿れる法性、水の上に霊座まします観世音へ信仰の響きを捧げ、滝の水は陸に滌ぎては豊作となり、大海に帰入しては豊漁満足となり、永久平和の幸福を祈る意なり。

謹白

大正十三年八月三十一日

発願者

禅源寺内祝聖会員一同
八月三十一日命名式参列者一同
禅源寺　正隆寺
寶海寺　願雄寺
準備委員長　米田岩吉

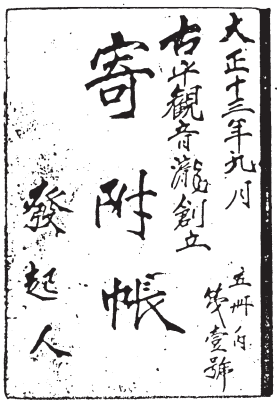
善意の寄付が集まる

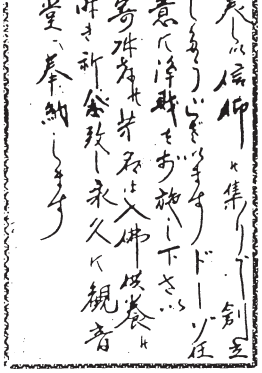
『観音滝』の命名式を行うために取りあえず道路の補修はしましたが、これから訪れるであろう参詣人や、行事に集まる人たちの通行を考えると、道路の改修工事には、かなりの費用を要することがわかりました。

このため、町内から広く浄財を集め、観音滝の霊場には小さい観音堂を建て、そこに寄付者の氏名を奉納することにしました。

十月初めまでに、観音滝霊場の建設に賛同し寄付をした人は千八十八人にも上り、美国町や余市町の人たちからも寄付が集まり、その総額は四百七十三円七十銭にもなりました。

＜寄付台帳と冒頭のあいさつ＞





断章小説　【ふるさと遥か】

反抗の軍歴（一）

Ⅴ

吉川義雄

筑波おろしの寒風が、霞ケ浦の湖面を渡って、あかく冬枯れた飛行場の芝生の天空に巻き上げ、北國生まれの彼でさえその寒さに身振えした。

海軍は、すべての呼称が艦隊と同じであり、兵舎の床でさえデッキ（甲板）と呼んでいた。総員起しのラッパが鳴り渡り、日課が始まる時は、特別な配置の者以外は、点呼を兼ねた総員集合のためにこのデッキを離れて、外に飛び出して行く。

吉野はその日ストーブ当番であった。分隊（陸軍の中隊程度）の皆が帰って来るまでに、二つのストーブを燃やすだけで、北國生まれの彼には苦もない仕事であり、ストーブは順調に燃えていた。

寒い日のせいか、その朝の兵舎への帰りは早かった。

下士官の一団が、「寒いッ、寒いッ」を連発しながらストーブを囲んだ。気短な一人が、まだ完全に石炭に燃え移らない火勢のうちに、デレッキを下から入れてかき回したからたまらない。ストーブの一つはあっさり燃焼をとめてしまった。

それからの当番の彼は惨めであった。先任兵長、上等兵の順で、彼の頬に容赦のない鉄拳が飛んで来た。口の中が切れて、生臭い血の味が口中一杯に拡がり、くいしばっている唇から、叩かれる度に飛び出した血が彼の白い艦内服を赤く染めた。

軍隊では、言い訳も、理非も通用しない。あるのは「天皇」を利用した絶対服従だけである。

「おいッ吉野、貴様よくも俺たちの顔をつぶしたくれたな、ついて来いッ。」

背の高い先任一等兵が、彼の前に突っ立ってあごをしゃくった。同じ等級でも、志願兵の彼等は入隊が六カ月早く、その仲間たちが、軍隊の飯の数をかさに吉野たちの仲間をいたぶっていた。

兵舎の出入り口近くにギァロッカー（物置）があり、彼はその中に突き入れられ、先任一等兵も入ってくるなり、すぐにドアをカチッとロックした。

「おい貴様ッ、あのザマはなんだ。たるんだ分だけ俺がヤキを入れてやる。歯をくいしばれ」

彼は、指をポキポキ鳴らしてすごみながら、ねずみをいたぶる猫のように吉野に近づいて来た。

正邪・善悪の通じない世界でも、人には耐える限度がある。果てることを知らない暴力による苦渋の血の味が、彼の口中に止むことなく広がっていた。

彼は口中の血とつばを、勢いよく床に吐き散らした。

「おいッてめェ、やれるもんならやってけれや、これだけやられて我慢してきたんだッ。よも俺のカンニン袋の緒を切ってくれたな。てめぇを殺すッ」

彼の行動は素早かった。スペァの道具の山からデレッキを抜き取るなり突進した。

ガシッと、先任一等兵の肩のあたりで、横なぐりの一撃が鳴り、さらに両手で振りかぶった彼の一撃が下ろされようとしたとき、先任一等兵は、悪夢から覚めたような悲鳴をあげて、必死に彼に許しを願った。

「待ってくれッ、よォ、よォなァ待ってくれッ。俺が悪いッ、俺が悪かったッ」

床にはいつくばって逃げ回る同年代の兵を、彼は自分をしずめるためにも、一度だけしたたかに蹴ってから、急速に敵意をなくした。

この部屋で起きたことを、一切なかったものとすることを先任一等兵に誓わせてから、彼等はそこを出た。

ホロ苦い勝利感はあったが、この先も起こるかもしれない自らの反抗の予感に、彼はひそかに身振いした。

〈この稿終り〉

孫たちの成長をねがって

渡辺ハツエ

数年前、まだ亡夫が健在だったころのことです。浜では鮭の盛漁期も終わって、漁業者の皆さんもホッとひと息という時期に、本州に住んでいる息子の嫁さんから電話があって、子どもが、鮭の生態についての話をじいちゃん、ばあちゃんに聞いてもらいたいと言っているので、今から電話でそれを朗読するというのです。

私はとっさに受話器を持ち直して、身構えてしまいました。すると替わって孫が、はっきりした、かわいい声で朗読を始めました。私は、すっかり緊張して聞いていました。

鮭のことについて、どのようなことを調べたのか――と、聞いていると、自分の調べたことを事細かに説明してくれました。小学校二年生の孫に随分と教えられました。

そのうちに電話を主人と替わりましたが、主人も目を細めながら、「うん、うん……」と、うなづきながら相好をくずしていました。

こんな些細なことでも、私にとっては生涯忘れられないような喜びであり、うれしい思い出になりました。

孫は古平で生まれ、小学校入学のときにお祝いをしてあげたのが、ついこの間のことのように思われます。孫たちとはしばらく会ってはいなかったけど、電話や文通で、その成長ぶりは手にとるようにわかっていました。鮭のように、四年経ったら元気に成長して、私たちに会いに来てくれるのを楽しみに待っていたものでした。

孫は姉が中学三年生、弟は小学校六年生になり、この夏休みには祖父のお墓参りもして、「来年もまた、絶対に来ます」と、語尾に力を込めたあいさつをして、元気に帰って行きました。

孫たちには、進学と進級の希望にあふれる春も間近です。

＝あとがき＝

▽遅ればせながら『せたかむい』今月号（123号）もどうやら出来ました。年内には一月号（124号）をお届いたします。

▽これからの企画ですが、むかしのこと――といっても、戦前の生活の思い出などをお聞きして、むかし話をご紹介したいと考えております。

▽いま古い写真の整理をし、保存に努めています。昔の写真がありましたらお貸しください。複写をしてお返しいたします。

▽来年は関心の高い西暦二〇〇〇年になり、二十一世紀？　という人もいますが、ちょっと迷いますよねぇ――。

川柳

老い三人笑いころげて明日に生き　石井愛子

山細り晩秋のとき浮き雲も　寝つかれず昔しのべばなお寝れず　北政道

はぐれ鳥散りをいとしむ老いのゆれ　誤作動のまんま生きてる老い二人　渡辺ハツエ

一年とも言えぬ齢にも冬は降る　談合もみんなでやれば恐くない

派手になる服を眺めて齢を知り　長生きの言葉の裏に住む孤独

政権を睨む小澤の改造論

大往生俺には出来ぬ深い業

遥かなる故郷の思い出

わが闘病日記 ⑪

[61]

橘　義春

病院では、配られる各人のお膳にはがき大の名札が付いているので、それを利用して、赤のサインペンで、

「いつもご苦労さまです。今日の鮭の甘酢かけは最高の味でした。これぞまさにプロの味です。」

と、前に福井幸平さんが書かれた一文をふと思い出し、そのおチエを拝借した。

それを書いているところへ美人女医の堀先生が来られて、

「橘さん、何を書いているんですか」

「今日の夕食のおかずがあまりにうまかったので、感謝のメッセージを書いております。いいでしょうか？」

「書いてあげてください。きっと励みになると思いますよ」

と言って、戻られた。

翌日の朝食のとき、いつものように配膳係がベットまで運んだあと、下げるのに私の前を通るとき、一人一人が目礼をして出て行ったのには、何かくすぐったいような気持ちだった。

今朝のミーテングで、患者から夕食がおいしかったというメッセージがあった、とでも報告されたのではないか。

午後、家内が面会に来ていたら、厨房の責任者がちょうど私のところへ来て、

「橘さん、これ来週の献立ですがどうぞよろしく・・・」

と言って、皆より二日も早く献立表を見せてくれ、何かうれしかったらしく、ニコニコしながら戻って行った。

考えてみると、病院食はどうしても塩分や糖分がひかえ目の料理となり、まずく感じるのが当たり前であろうとおもわれるが、それを作る人たちは、限られた条件の中で一生懸命やっているんだ、それを忘れてはならない。

私もうまいものを食べさせていただいて、感謝のメッセージを書いただけなのに喜んでいただけるなんて、こんなうれしいことはない。

八月二十二日（金）
心電図検査、採血
八月二十三日（土）
頚食道エコー検査

心臓専門の女医・坂田好美教授の診察を受ける。退院してからわかったことだが、坂田好美先生はテレビにも出ている有名な先生だという。

退院して半年も経ったころ、たまたまテレビのスイッチを入れたら、突然、坂田先生が現れたのにはびっくりした。厚生大臣から表彰されている場面だった。

普通なら、私のような者が坂田先生の診察を受けようとすれば、大病院の先生の紹介状でも持って行かないととてもできない相談だ。ところが、主治医の岡田先生が、私の心臓の動きがどうもおかしいのを心配して、特に坂田先生にお願いして診てもらうことになったらしい。岡田先生が私を車椅子に乗せて、エレベーターを二回も乗り換え、長い廊下を坂田先生の診察室まで連れて行ってくださったのだ。

この広い杏林大学病院内の廊下を、車椅子の患者はぞろぞろ往来しているが、押しているのは皆ヘルパーさんか看護婦さんで、先生が押しているという光景はちょっと見られない。ありがたいことだ。私も先生の医療に役立つなら、できるだけの協力したいと思っている。

古平ホトトギス会

母の味なかなか出せぬ鰊漬　斉藤波留
木枯しや庭木ゆさぶり木の葉舞う　山口悦子
友等来て香の消えざる秋彼岸　越野敏雄
絵手紙に描くもの手折る秋の庭　大和田絵伊
消灯の婦長見廻る夜寒かな　福井幸平
雪虫の取り残されてバス発車　仲谷美砂

鮭不漁雪虫の舞う浜辺かな　大島喜恵
大根の青肩並ぶ雨の中　関口勝志
どこまでも紅葉重ねし山路かな　よしざき理
初雪や母を案じる息子の電話　山口浪
穫り入れの豆択りいるる三姉妹　仲谷比呂子
水上へ銀鱗散らし溯る鮭　越野清治
初雪や起きて又寝ることにして　室谷弘子

古平町岬短歌会十一月詠草

綿の花見たきわがため絵手紙に書きてたまへり花終りしと　池田テル
晩秋に咲きし小菊の花の群れに冷き雨の葉先伝ひて　田中香苗
ガラス戸に映れる秋の澄む朝湯の宿摩周ランドを発ちぬ　竹内コト
花畑に生ひし小豆の一株はたわわに実成り強飯（おこわ）に蒸したり　榊佳代
公園に青く群れゐる雪虫よ宇宙遊泳のごとく漂ふ　堀典子
長崎さんを施設に訪へば足どりも軽く廊下を歩み来ませり　東美知
雪来るとの予報に出でて一抱へ折り来し菊に家の内匂ふ　奥山きよみ
参道に積りし雪を夫が除く除雪機の音は冬だとささやく　山口スエ